

[67] ベジヤールの生涯と作品 ～永遠を見つめる目～

ベジヤール・バレエ日本公演2004

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

ベジヤールのカンパニーの来日も通算して十一回を数えたが、今回の「モーリス・ベジヤール・バレエ団2004年日本公演」では、プログラムの選定に、これまでとは違う配慮が感じられた。それはたぶん振付家がここへきて自分の生涯と作品を振り返り、それを鮮明な形で世に残していこうと考えはじめたこととの表れではないだろうか。

Aプロの最初の作品は『海』。昨年十二月に発表されたばかりの新作だが、自らの人生を振り返る眼差しまなざしが同時に永遠を見ている。

海原の演出がいい。舞台一面を覆う青い布の中央高く、女人が立つ。その裳裾もすそに小さな波頭が立ち、それを掲げて海セイレンの魔女たちが覗いた。轟惑的で何ともしやれたアイデアだ。

『バトリー・フュガス』は一九五四年の作。ベジヤールの現代バレエ第一作をジル・ロマンが踊る。まるで初期作品の目録のようで、振付家の心境がしのばれる。

『これが死か?』（一九七〇年）はリヒャル

[67] ベジヤールの生涯と作品 ～永遠を見つめる目～

ベジヤール・バレエ日本公演2004

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

ト・シュトラウスの声楽曲『四つの最後の歌』に乗せて、生と死を描いたもの。精緻を極めた硬質な振付に結晶している。

『バクチ』（一九六八年）は世界中のガラで踊られる有名な作品。しかし今回のように通し（全三部作）で見られる機会は少ない。内容はインドだが、動きはポワントを駆使した肉體造型の粹。まぎれもなく二十世紀の振付の記念碑的作品である。

Bプロはモーツアルトのオペラをまるごと使った『魔笛』全幕。ベジヤールにはオペラに振り付けたバレエが幾つかあるが、神話的な人物によって壮大な宇宙観を描き出す点、また話の筋や人物たちの科白を語る弁者を登場させている点で、ワグナーのオペラを土台にした『ニーベルングの指環』（一九九〇年）を思い出させる舞台作りだ。初演は『指輪』より十年近く前の八一年で、日本では二度目の公演となる。

オペラをバレエにするときのメリットは、

[67] ベジヤールの生涯と作品 ～永遠を見つめる目～

ベジヤール・バレエ日本公演2004

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

音楽のレベルが高く、構成がしっかりして、
て分かりやすいこと。その反面、オペラの舞
台のイメージが強すぎて、ダンスという身体
による表現に違和感を覚えることもないでは
ない。しかしその変換こそが、じつは最も刺
激的で発見に満ちているのだ。

たとえばタミーノやパパゲーノは、愛の成
就のために試練を乗り越える若者なのだから、
澁刺はつらつと躍動的な若者であるはず。でもオペラ
ではほとんど動かず、観客はその声だけに愛
や苦悩を感じ取る。しかしバレエではそれが
身体の動きで表現されるのだ。まずはその驚
きそのものが大きな感動である。

特にすばらしかったのは、パパゲーノを踊
ったウィリアム・ペドロの、光が飛び散るよ
うな躍動感、そして気ままに明るい表現力。
まさに録音のフィッシュヤー||ディスクハウの歌声
に匹敵する、いやそれをも凌ぐ柔らかさ、力
強さだ。

ザラストロ（マーティン・ヴェデル）もオ

[67] ベジヤールの生涯と作品 ～永遠を見つめる目～

ベジヤール・バレエ日本公演2004

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

ペラでは荘厳で重々しい僧正のイメージだが、夜に対抗して光り輝く男性原理とあれば、しなやかな裸の上半身と粘り強い足腰を駆使して、見事な造型美で正義を歌い上げるのも納得がいく。ヒステリックなコロラトゥーラで舞台を跳梁する夜の女王も、アクの強いアクロバティックな動きのモノスタトスも、まずはその意外性、ついで表現の輝かしさで魅了する。

中央に赤い台を据えたシンプルな装置を上下に使い、大蛇も哲学的想念も少人数の群舞で描くなど、意表を突く演出はさすがだ。

初演で名を連ねた人気スターの多くが舞台を去っている。しかし今のベジヤール・バレエでは、若木のように勢いのいいダンサーが、不朽の傑作を踊っているのだ。そして、ベジヤールの作品が、たとえ時代が変わっても生きつづけ、踊りつづけられるであろうことを身をもって証明しているのである。